

## 大賞

### 『色々』

きぼママ

「引っ越すことになったから」父が重い口を開いた。程なくして、生まれ育ったマイホームを去った。それは私が十八才の時。庭がついた二階建てのマイホームから引っ越すことが高校生の私には理解出来なかった。父に言われるがまま自分の荷物を段ボールに詰めた。ふと窓から見える道を近所のお兄ちゃんが歩いていく。「この家とお別れか…」何不自由なく暮らしてきた温かな我が家。全ての荷物と思い出を大型トラックに積み込み、車に乗り込んだ。「バイバイ」生まれ育った家に別れを告げた。三十分程走らせてトラックが着いた先にはポツンと小さな一軒家が建っていた。どこからどう見ても古くて汚い。築五十年の家はモルタルの外壁にひびが入っている。蜘蛛の巣が張る玄関ドアを開けるとコンクリートがむき出しの床が出迎えた。家の中は平衡感覚を失うように傾いている。今までの広々とした二階建ての4LDKからこのおんぼろな平屋の1LDKが私達家族のマイホームとなった。弟はそのおんぼろな家に入るなり機嫌が悪くなった。それもそのはず、私も弟もちょうど多感な時期だった。「こんな古くて自分の部屋もない家なんて最悪だ」弟が呟いた。母が「ごめんね…」と涙を浮かべ、小さく答えた。大人の事情だと悟った私はこう答えていた。「私は部屋いらないから…。使っていいよ」たった一つの部屋を弟の部屋にした。必然的に私の部屋はある訳がなく、三畳程のダイニングが居場所となった。勉強する時も友達に電話をする時も何をするにもダイニングだった。こんな不便な暮らしにもぐっと堪えるしかなかったのだ。大学生活も慣れ始めた頃、私は恋をした。ある日、帰りが遅くなった私を心配した彼が「家まで送っていくよ」と言ってくれたのだ。一瞬にてあのおんぼろの家が脳裏に浮かんだ。古くてひびが入った外壁、傾いた玄関先を見られることに恥ずかしさを感じていた私は「大丈夫！一人で帰れるから」と必死に彼の優しさを断ってしまった。綺麗な洋服にバッチリのメイクをした私があんな家に住んでいるなんて思われたくないと思ってしまったのだ。そんな私の恋は長く続く訳もなく終わりを告げた。いつものように三畳の狭いダイニングに座っている私に母がぼそっと呟いた。「あなたの人柄を見て選んでくれる人にしなさい」私はハッとした。母には私の恋を話したこともなかった。しかし、この三畳のダイニングでは私の恋を母に隠しきれていなかったようだ。それ以上、何も言わない母。沈黙のあとに妙に納得してしまった私。こんな家になったのは親のせいだ、弟が部屋を欲しいというから私は我慢しているのに、だから恋も出来ない、と私は全てを人

のせいにしていた。そんなつまらない思いを母が一瞬にて砕いたのだ。彼に堂々と出来なかった私が悪い。こんな古い家の何が悪い、ひびの入ったモルタルの外壁の何がいけない、傾いた玄関先だって三畳しかないダイニングだってプライベートがなくても良いじゃない。自分のことをしっかり見てもらえたらそれだけで良かったのだ。そんなおんぼろの家に住むこと三年、遂にこの家を離れる時がやって来た。あの突然の引っ越しをした三年前と同じように段ボールに荷物や思い出を詰めていく。小さな家の荷物はあっという間にトラックに積まれてしまった。ガランとした小さな古い家。傾きがより一層目立っていた。三年前、ここのドアを開けた時は良い思い出なんか出来るはずがないと思っていた。しかし、振り返れば振り返るほど家族との思い出が蘇ってくる。すきま風が強い中ストーブの前でくっつきながら暖をとる。まるで猿の群れのようなようだった。ある時はご飯支度をする母とダイニングにいる家族で会話をする。こんなにも互いの距離が近いことはないだろう。母に電話の内容さえ聞かれてケンカにもなったっけ。ふと思えば十八年間暮らした二階建ての綺麗なマイホームよりこの古くて汚いマイホームの思い出の方がたくさん思い浮かんできた。思わず、笑みがこぼれる。人生色々な経験をするのも悪くない。あのまま二階建ての綺麗なマイホームで暮らしていたら、こんな思いは浮かんでこなかっただろう。「私の人柄を見てほしい」自分にも自信を持てた。「ありがとう」そっと玄関ドアを閉じ、ひび割れたモルタルの外壁を見上げた。人の思いは色々な経験をして色づけられていく。時には心が傷ついたりもする。家や外壁も同じだ。この古い家の外壁は様々な自然の力で色づけられ、傷つき、ひびが入った。人も家も色々な経験をする事で変わっていくのだろう。モルタルの外壁を見上げていると横で父がそっと呟いた。「モルタルの外壁はひび割れることで建物を守ってくれていたのだよ」ありのままの強さを教えてくれたこの古い家に私は優しく別れを告げた。